

第四十一章 召 命

運命の同日選挙は、参議院選挙の告示の五月三十日からはじまった。その日、日本列島は、東方海上に中心を持つ大きな高気圧に覆われて、夏型の気圧配置に変わり、朝から蒸し暑さが襲っていた。この日まで、数々の障害を渾身の力で克服しようとしてきた大平首相の心境には、もはや一点の曇りもなかった。

午前九時からの迎賓館での華国鋒中国首相の歡送式を終えた大平首相は、グレーの背広に濃いエンジのネクタイをつけて、永田町の自民党本部にあらわれ、十時十五分、本部玄関前の出陣式に臨んだ。腕を曲げ、こぶしを突きだすカツツボイズで闘志をみなぎらせて激を飛ばしたあと、首相は、自民党推薦東京地方区候補者安井謙の応援に、新宿に向かった。集まっている約三千人の聴衆にむかって、首相は遊説車の上から力強く呼びかけた。

「参議院の改選選挙は、本日から幕を切って落されました。やがて、われわれは、衆議院の総選挙も同時にお願いしなければならなくなりました。……皆さま、人間の集団にはいろいろ意見の闘いも紛争もございします。家庭において、職場において、あらゆる集団において常に意見を闘わし、よきものを創造してまいりますのが、人間生活の発展であり、民主政治の道であると思っております。自由民主党も、結党以来、多くの論争を重ね、紛争を繰り返してまいりましたが、しかしながら、国民の安全を守り、生活を防衛し、日本の未来に責任を持たねばならぬという大きな一点におきましては、みじんも狂いがないのであります……。」

白手袋でつかんだ遊説車の手すりをゆすり、全国にとどけとばかりの熱気のコもった大音声である。首相は熱の入った時の特徴であるボディアクションを加えて、次第にボルテージを上げて行った。言い直しても淀みもなく、頭の中の思いが、そのまま言葉になって出てくるような演説ぶりであった。

第一に訴えたのは、国の安全である。

「わが党は、平和を保障し、安全を守らねばならぬ厳粛な責任を持っております。……もし、社共両党の主張するように、安保体制を否認いたしますならば、……われわれの軍事力だけでわれわれを守らなければならないとすれば、われわれの今日の繁栄も生活も犠牲にしなければならぬのであります……」

首相は第二に、生活防衛への努力を約した。わが国が二回にわたる石油危機を克服し、欧米諸国に比べて良好な経済状態にあること、石油の不足をきたすことのない政策運営を行っていることへの評価を求めた。

「このことは、市場経済の活力を活かし、国民が真剣な努力を傾け、政府がこれを善導してまいる自由経済体制が誤りではなかったことを証明いたしております」

第三に、未来の安全を説いた。

「かわいい子供さんには確かな未来を、……お年寄りには、第二の生きがいある人生を用意しなければならぬのであります。あらゆる困難の中に確かな未来を……このことができる政党は、自民党をおいてほかにないことも、また明らかでございます」

平生の首相とはちがった高い調子が続いていた。集まった聴衆は吞まれるようにこの演説に聴き入り、道行く人の多くが足を止めた。「いつもとちょっと調子が違うな」と囁き交わすものもいた。

と、突然、僅かであったが、首相の声がかすれ、生気が衰えた。だが、論旨を乱すことなく、演説は激しい野党攻撃にうつった。

「共産体制といい、社会主義体制といい、国民に対して、奇らしむべし、知らしむべからずの政治体制をとっておりますので

あります。権力者は何をしておるか、何を考えておるか、どういふ生活をしておるかを、さっぱり国民が知らないような体制をもって、どうして政治の倫理の確立と行政の綱紀の確立ができるでありましょうか。わが自由民主党は、国民の皆さまの知りたいという権利に応えております。われわれの仲間の中でも、疑惑を受けた方々は、司直の手によって十分糾明していただいておりますのであります。自ら政策対応能力のないことを棚に上げて、自らの能力の不足を問うことなく、他人の非ばかりを朝から晩まで洗うことによつて歳費をいただいておりますような者に、国民が本当に信頼をいたすものでございましょうか。」(『回想録』資料編参照)

約三十分の演説を終えた首相はひどく疲れた様子だった。首相の車は、休息を予定されている自民党本部に急いだ。その車中、首相は、同乗した福川、於久両秘書官と警護官に、「暑いなあ、ちょっと苦しい。ノドの奥が痛い」と訴えた。心配する秘書官に、首相は汗をふきつつ、「張り切り過ぎたなあ、午後は抑え気味にしよう」と言いながらも、演説内容について「どうだった」と熱心に問いただした。

党本部についた首相のからだは、上から下までシャツが汗でグッショリぬれていた。総裁室の佐藤テル子や秘書官らが手伝つてタオルを何度も取りかえてぬぐつたが、噴き出る汗はなかなか止まらず、ソファに横になつた首相の顔色はよくならなかった。用意された昼食のソバにほとんど手をつけず、好物のメロンも一口か二口、口にしただけだった。

「医者を呼びましょうか」といふ秘書官の問いに、首相は「もう大分案になった。夕方、家に呼んでおいてくれればいよ」と答えた。関係者の間では、午後の演説を打ち切ることも検討された。だが、陣頭に立つべき首相が緒戦に、身体の不調で遊説を打ち切つたとあつては、その与える影響はあまりに大きすぎる。関係者は中止の決断に踏み切れなかった。結局、「大勢集めているんだろ」といふ首相の言葉に、遊説は続行されることとなった。

「初日からこんなに疲れるのはいかんなあ」とつぶやきながら立ち上がった首相は、自民党公認の神奈川地方区候補者秦野章のために午後には予定された横浜市内四力所の遊説に向かった。「一回五分ぐらいにしてください」といふ周囲のものの言を容れて、演説はなるべく短く、できるだけ総裁車で身体を休めるようにしたが、遊説車の屋根に上がると、ときと

して、苦しさをこらえている表情がうかがえた。それでも、首相は、終盤には、元氣を取り戻したように見え、演説は身ぶりや手ぶりを交えて、二十分にも及ぶようになった。同行した関係者は首相の身体を案じながらも、その演説ぶりから、大したことはなかったのではないかと、不安を追いやることにつとめた。だが、首相は残された最後の力を振り絞っていたのである。

一日五力所の遊説を終えた首相は、午後六時半に瀬田の私邸に帰った。奥の日本間に用意された寢床につくと、予め待機していたかかりつけの鶴巻龍之助医師が直ちに心電図をとった。針が首相の心臓の状態を示すチャートを描くと、医師はさつと表情を曇らせて、大平夫人ら一部のものに、「狭心症か、心筋梗塞の疑いがあります。よくもちましたね」と告げた。主治医の葛谷信貞を始め、心臓病の専門医である朝日生命成人病研究所の藤井潤、虎の門病院の山口洋ら三人の医師が、玄関先につめかけている総理番の新聞記者に覚られないよう、裏口から密かに招き入れられた。医師団の診断結果は、「絶対安静、直ちに入院」であった。待機していた関係者は、背筋の両側を言いようのない衝撃が走るのを感じた。九時頃には、会合に出ていた伊東官房長官がかけつけた。

医師の手によって虎の門病院への入院手続きがとられた。報道陣にもれるのを防ぐため、慎重を期して、近所の人の名前前で入院用の民間の寝台車が用意された。志げ子夫人、伊東官房長官、秘書官らと医師団との間で今後のことが協議された。まず、入院の病名が問題となった。心臓の虚血性疾患であることに疑いの余地がなく、事実とかけ離れた発表は好ましくないという医師団の意見があり、一方、そのまま公表することの政治的影響を心配する秘書官らの主張が交錯した。結局、「過労による」「過性の不整脈」があり、数日間静養を要するので、大事をとって入院する」と発表することになった。遊説に行っていた田中六助副幹事長も人目につかぬようにつけてきた。ごく少数の党幹部には、入院の旨が告げられた。

玄関先の総理番の記者がひきあげたのは、十一時二十分である。それから、用意された寝台車が玄関につくと、みな

首相を抱き上げて担架に乗せ、寝台車に運んだ。首相は担架の上で、じっと目を閉じ、両手を胸の前で合わせて合掌の姿をとっていた。だが、首相の意識ははっきりしており、「情けないことになったよ」と苦笑をし、心配する家人らに、「たしいしたことないよ」と言った。

真夜中を回り、日付は、五月三十一日となった。その午前零時過ぎ、山口医師と看護婦一名、それに二男の裕が同乗した寝台車が大平邸を出発した。家族らに乗せたハイヤーが一台、これに続いた。付き添って警護にあたったのは、吉崎良宏首席警護官ただ一人であった。

病院についた首相は直ちに六階の心臓集中管理室に入れられた。上体にはモニターがセットされ、常時監視の体制がとられ、点滴が行われた。鎮静剤のせいもあって、首相は間もなく眠りに落ちた。

病院到着が確認された上で、自民党本部を通じて、三十一日に予定されていた熊本遊説の中止が関係者に連絡された。突然の予定変更で、報道陣は大騒ぎとなり、入院先を探りあてた新聞記者が集まって発表を求めたため、森田秘書官は、申合せのとおり、首相は過労による一過性の不整脈があるので、大事をとって入院したと発表した。

入院の翌朝、目をさました大平は、「心臓の発作だったのか。全然わからなかった。それだったら、横浜で四力所も演説するのは無理だったなあ。何か胸がしめつけられるようだった。身体からしぼり出すようにしないと声が出なかった」と言った。

入院後しばらくは、鎮静剤のせいもあってか、うとうとしていることが多かったが、時々、腕を動かし、何事かつぶやいた。病室を見舞いに来た孫たちは、その姿を見て、「おじいちゃんは、選挙をやっている」と話し合った。

見舞客が殺到したが、絶対安静を命ぜられていたので、ほとんどが本人に会わずに帰ることになった。

六月一日には、海外からの見舞いの電報があいついだ。見知らぬ女性から花束が届けられました。

六月二日になると、痛みも消えたようで、首相は大分元氣を取り戻し、時折、医者に病氣の状況をきいたり、時には冗談を言ったり、秘書官らに選挙のことをたずねたりするようになった。党内、政府、友人、経済界はもとより、野党からも見舞いが寄せられた。

この日は衆議院選挙の公示の日で、大阪でその第一声をあげ、今後の展望と所信を明らかにする予定であった首相は、病床から国民各位に対するメッセージを送り、自由民主党への理解と支持を訴えた。

また、診断に慎重を期していた医師団は、この日の午前十一時によく記者会見に臨み、三村信英医師が代表してメモを読み上げた。

「病名につきましては、過労が引き金となったと考えられる『狭心症』でございます。……しかし、今までの経過は良好でありまして、今後の病状につきましては悪化する可能性は少ないものと考えております。あと、どのくらい、ご入院になつていただかなければならないかは、今後の経過観察によらなければ判断は困難であります。現時点では、少なくとも今後一週間はご入院を続けていただき、慎重に経過観察をすることが必要と考えております……。」

記者たちからは、遊説の可能性はどうか、六月二十二日から行われるベネチアサミットに行けるか、心筋梗塞の可能性はないか、などの質問が飛んだが、医師団は、記者たちに不安を与えないようつとめて冷静に対応し、遊説はむずかしいが、個人的にはサミットに行けると思う、心筋梗塞にならないように一週間程度の安静が必要なのだ、と答えた。しかし、事実は、医師団はこの時点で一カ月半の入院、一カ月半の自宅療養が必要という診断を下していたのである。この日森田秘書官が、香川第二区で首相の立候補届出をすませた旨報告すると、首相は、「おれが選挙に出るのも、これが最後だな」ともらした。

六月三日、首相の回復ふりはいちじるしく見え、田相場や物価について聞いたり、選挙の模様を心配したりした。校内幹事長が見舞いにきて、首相は、ベッドの背を少し上げて応対した。この時のことを校内は次のように回想している。

「如何でございませうか」と申し上げると、手を差しのべられた。私は『選挙は順調に進み、心配はありません』と申し

上げた。総裁は、「苦勞かけるな、しっかりと頼む。なんとしても勝とう」と激励のお言葉があり、さらに十分に手をつくすように具体的なご指示があった。細い声だったので、私は一言も聞きもらさないようにつとめた。総裁が、いろいろ心配しておられるのが切々と私の胸にひびいた。『回想録』追想編)

この日、カーター米大統領から「ベネチアでお会いできるのを楽しみにしている」とのメッセージが届いた。海外からの見舞いの電報が相ついだ。

周田の目には、首相の容態は、日増しによくなつたように見え、付き添う家族を始め、毎日朝夕立ち寄る伊東官房長官らは愁眉を開いた。

六月四日には、テレビが持ち込まれ、一日三十分という制限付きだが、ビデオでゴルフや寄席を見ることが許されるまでになった。この日、鈴木総務会長の見舞いに対して、首相は、「医者には慎重だが、もうすっかりいいんだ」と、自分の判断を述べた。五日になると、さらに回復が進み、首相は、すっかり退屈した。倉石忠雄法相が、閣僚を代表して見舞いに来た。

また、宇野宗佑行管長官から伊東官房長官に電話があり、茅ヶ崎に寒川神社という厄除けの神さまがあるので、ぜひ来るべき人を派遣してお祈りするようにとの提案があった。早速、於久秘書官が祈願に赴いたが、一つ禁欲をしないと効果が薄いと言われ、その日以後、於久は好きな煙草を断つた。

六日には午後には持回りの閣議があり、大平総理は上半身を起こして署名した。七日期九時半には、西村副総裁が見舞いに現われた。大平首相は、「西村さん、党の方は、あなたが陣頭指揮をとってください」と頼んだ。

伊東官房長官をはじめ秘書官は、サミット出席問題について苦慮しはじめ、再三にわたって、医師団と相談するようになった。できることなら出席して欲しいとの考えでは共通していたが、医師団はなかなか首をたてにふらなかつた。政治家として、ぜひ、サミットに行くべきだという固い信念を持っていた田中六助副幹事長と、慎重を期す山口医師との間に激しいやりとりがあったりもした。

入院後一週間も経過した頃になると、「入院が長期化する」、「サミットへの出席が微妙」、「代理出席を検討」などといった報道が大きく取り上げられ、これをめぐって政局は重大な局面になるなどの発言が目立ちはじめた。

マスコミは、臆測を交えて、病状についてさまざまな情報を伝えた。噂も飛びかった。虎の門病院の会議室に連日つめてある記者団から、そのような無用の臆測を消すために、短時間でも大平首相自身が代表取材に応じてはどうかという提案があり、医師団は、小人数、短時間、医師立会いでなら受けてもよからうという判断をくだした。首相自身も、気軽にこれに応じ、八日、午前九時二十四分から二分間、内閣記者会の代表三人を招いて会見することになった。そのやり取りは、次のようなものである。

内閣記者会を代表してきました。

首相 ああ、ご苦労さん。

気分は。

首相 爽快だ。

入院中、何を考えておられたか。

首相 選挙のことばかり……。

いま一番心配していることは。

首相 早く床払いしたい、それだけだ。

退院して元気になられたら、まず何をしたいか。

首相 まだ、そんなことを考えていない。早くよくなって、仕事を……。

国民にいま一番言いたいことは何か。

首相 一挙に重大な選挙を二つ同時にお願いしたので、うまくこなしてくればよいが。十分な用意もなく入ったことですから。日本人はそれなりに、うまく、手際よくやってくれるのでは……。

元氣になって、できればサミットに行かれるように、との関心が持たれています。

首相 ええ。ありがとつ。

無事に会見を終わって、首相も爽快げであった。

九日には、第二回目の医師団の記者会見が予定されていたが、発表に先立って、首相自身の見解が発表された。

「本日、医師団より入院後の経過および今後の治療方針についての総合的な診断結果をうかがいました。それによりますと、病状の経過は良好であり、近い将来、政治活動に支障のない健康体に十分なりうるというところであります。しかし、そのためには、発病当初の療養が極めて重要であるとの厳しい注意をうけております。この医師団の判断を十分に踏まえて、当面の遊説は見合わせることにいたしました。また、サミットの出席については、サミットの開催時期が一週間あたりであればともかく、現時点で判断する限り、ある程度の危険を伴うので慎重に考慮すべきであるとの見解が示されました。私としましては、サミットの意義と日本の果たすべき役割を考えると、依然として是非出席したいとの希望を持っております。今後とも医師団には最善を尽くしてもらおうようにご努力をお願いしておりますので、十七日までには私自身で出席するか否かを決めたいと思っております。」

医師団の記者会見は、午後五時四十五分から行われ、山口医師は、「今後少なくとも二週間の入院が必要」と発表した。この発表で、翌朝の新聞には、「サミットへの出席絶望」、「首相退陣必至か」といった見出しがおどった。

そのような新聞報道をよそに、大平首相の容態は、さらに快方に向かっているように見えた。医師や看護婦に冗談を言い、訪れた旧友の小野季雄、平参宮電鉄社長のために、「得病更知旧友情 明常思長夜之愁」という漢詩を作ったりもした。選挙情勢には大変な関心を払っており、また、選挙後の進退についても、慎重に思いをめぐらせていたようである。

選挙後の首相の動向には、いろいろな見解が公式、非公式に流された。世代交代を主張する声、首相の大局をみた決断を求める声など、さまざまであった。大平首相自身は心ひそかに辞任を決意していたと思われる。が、「ただ、投げだすわけにはいかない。政局の安定のために、今後の方向をつけておかねば」と考え、数日前から、森田秘書官に、田中元首相

に会って、実情を正直に話して、意見をきいてくるように指示していた。それが十二日早朝に予定されていたのである。

十日には、全党員にあてて必勝を訴える大平首相名のメッセージが発表された。それには、「苦痛なくして勝利なし、苦患なくして栄光なし」と記されていた。十一日の夕方には、桜内幹事長と塩崎潤総務局長が選挙情勢の報告にきた。北海道から始まって神奈川五区まできて、時間が長びいたため打ち切られた。

サミットへの出席については、大平首相自身にも迷いがあった。その発言と表情からは、無理はすべきではないが、できることなら出席したいとの気持ちが読み取れた。サミットへの出席の有無が首相の進退にも関連する政治的意味合いを持つだけに、伊東官房長官や田中六助副幹事長は出席を強く進言しており、大平首相の回復ぶりも出席が可能とみられるほどであった。

その夜、森田、福川、佐藤の秘書官らは、医師団にサミット出席の場合の機内のベッド、同行する医師と看護団、持ち込む医療機材、現地での休養態勢など具体的な医療看護態勢を確かめたが、いずれにしても、首相の行動ルートを実地に確かめる必要があるとの結論に達した。飛行機の乗降、ホテルから会場への移動、会食の状況などを現実において確かめてみる必要があったからである。そこで、佐藤秘書官が急遽ベネチアへ赴き、十七日の総理自身の出席決定までにその情報を持ち帰ることになった。これは直ちに伊東官房長官の了承を得て、大平首相にも報告された。首相は、「そうか、わかった」と答えた。

午後九時、看護婦がその日最後の薬を与えた。

夜中に一度目覚めた首相は、「いま何時ごろか」とたずねた。付添いが、「十二時頃です」と告げると、「そう」と言っ
眠りに落ちた。

異変は、その未明、午前二時二十五分に起きた。

付添いの「早く起きてください」という声に、隣室で寝ていた森田秘書官が首相の病室に入った時には、すでに異常を
発見した看護婦が、首相の胸をこぶしで激しくたたいていた。報せを受けて、志げ子夫人、二男裕の公子夫人、三男明夫

妻、それに伊東官房長官、秘書官らがかけつけた。田中六助副幹事長も呼ばれた。

うなるような声が何度か首相の口からもれた。

志げ子夫人、公子夫人の話によると、首相は小さく手をふって、まだ遊説をつづけているように見えたという。

心臓マッサージや電気刺激が続けられたが、その甲斐は見えなかった。

回復の見込みがほとんどなくなった五時から五時半になって、田中元首相、鈴木総務会長、桜内幹事長ら親しかった党・政府首脳に「危篤」の報が伝えられた。報道関係者にも「首相の容態急変」が知らされた。

医師が志げ子夫人に臨終を告げたのは、五時五十四分であつた。